

The understanding of landscape

MITSUBOSHI Muneo

Key words: landscape, far-sense, near-sense, sensation, need

Abstract

The nature of landscape which was a product of the visual sensation, a far-sense, was analyzed in terms of the dichotomy of the far-sense and the near-sense. Taking their innate nature or functions into considerations, it was argued that such landscapes seemed to be highly appreciated as those in which strong perspectives could be obtained and of which field was clearly separated into “figure” and “ground” as the Gestalt psychologists assumed for the perception of object. Bright field could also be appreciated, because it satisfied “the need” of the visual sensation.

On the other hand, the landscapes, which were considered to satisfy “the need” of near-senses, typically the tactile sensation, could also be appreciated. Thus soft, warm, and round-shaped landscapes could be such candidates.

The appreciation of landscape should depend on various factors including the far-and near-senses and presumably higher processes.

風景の理解

三 星 宗 雄

キーワード：風景、遠感覚、近感覚、感覚、欲求

はじめに

中国の言葉に「風景如画」という言葉がある（ベルク、1990）。風景は画（絵）と同様に、見方というものがあり、それは身につけなければならないものだ、というような意味である。この言葉は我々にいろいろなことを教えてくれる。第一に、もしその見方が身についていなければ、風景は単なる「環境」に過ぎなくなってしまうことである。風景は人間の目を通して初めて存在するものなのだ。第二に、「風景の見方」は生来的に備わっているものではなく、学習されるべきものであり、ある種の訓練が必要だということである。第三にそれだけ風景の評価は難しいということである。ベルク（1990）はこう言う。「われわれが風景を知覚するのは絵画や詩歌などで教育され、仕込まれた視線によってであり、そのような教育がなければ、われわれが知覚するのは環境にすぎない」のである。

風景は視覚によってもたらされるイメージである。ここに風景と景観の区別はしない。もっぱら視覚的なイメージを景観（landscape）と呼

び、一方風景 (scenery) は視覚だけでなく、五感全体で享受されるものの、さらには社会経済的、歴史的要因をも含む概念だという考え方がある (イーファー・トゥアン、1999；鳥越、1999)。しかしここではそれらの厳密な区別はせず、景観または風景をどちらも視覚を通して得られるイメージとして扱う。したがってもし風景をより広い概念として取り扱う場合には、視覚以外の多くの要因を考慮して理解しなければならない。

ところで風景または絵画などの視覚的なイメージの評価に関しては、本来視覚以外の感覚の評価に用いられる修飾語が使われることが多い。例えば「暖かい風景」、「寒々しい光景」、「ダイナミックな構図」などがある (図2)。特に触覚の言葉の援用が多い。今「援用」と書いたが、そうした他の感覚の言葉を使うということは、それに相当する視覚的な言葉が欠けているためであろう。あるいは他の感覚の言葉で表現した方が実感として理解されやすいためかも知れない。そのどちらであっても、視覚と評価との結びつきは、他の感覚と評価との結びつきに比べて脆弱であると推察される。

視覚と他の感覚という分類はいわゆる遠感覚 (far sense) と近感覚 (near sense) という感覚の二分法を思い起こさせる。本論文では、視覚を代表とする遠感覚と触覚を代表とする近感覚の機能的な相違は何か、その違いの意味、およびそれらの機能的な違いと風景の評価における関連性について考究する。さらには視覚的なイメージにおける快適性とは何か、風景または絵画の「見方」がしばしば「読み方」と言われることの根拠などについて分析を試みる。

1. 遠感覚 (far sense) と近感覚 (near sense)

遠感覚 (far sense) は遠くの物体についての情報をもたらす感覚である。視覚がその代表的な感覚であり、聴覚もこれに入る。一方近感覚 (near sense) は近くの物体についての情報をもたらす感覚であり、触覚と味覚がこれに入る。嗅覚はその中間的な性格で、近傍感覚と呼ばれる。

近感覚においても刺激自体は遠方からもたらされることもある。例えば 1.5 億キロ離れた太陽から発せられる赤外線によって、我々は熱を感じることができる。また 2000 年の三宅島の噴火によって東京都下で硫黄の臭いがしたという。しかしそのどちらの場合も、温度感覚または嗅覚だけを通して、その刺激源までの距離情報について知ることはできない。

とは言え、太陽など極端な場合は別にして、温度感覚などでも多かれ少なかれ距離感を感じることができるし、嗅覚などでもその強弱によってある程度距離感をつかめるので、この違いは相対的なものである。

1.1 遠感覚と近感覚の機能

a. 外界への探索行動の誘発

私たちは視覚や聴覚を通して得た情報にしたがって、外界を歩き回る。特に視覚は私たちの外界での行動のガイドとしての役割を持つ。近感覚ではそうした機能は弱い。

もちろん触覚を通して外界の探索行動を行うことはありうる。しかしそれはきわめて限定された空間の範囲内である。視覚障害者が杖を使って健常者と同じように自由に空間を歩き回っているように見えるが、そ

れは主に音（聴覚）を通して可能なのである。純粹に触覚の場合には、手あるいは身体が物体からいったん離れたら、その段階で外界の探索は終わるのが普通である。

b. 遠感覚は事物が安全であるか危険であるか、前もって知らせる。一般に安全あるいは危険な事物と接するには多少の時間がかかるため、その物体が「何か」を判断するための時間がある。その判断にしたがってその物体に接近したり、避けたりする行動が生じる。それによって外的環境への適応を促す。例えば、向こうから歩いてくる人が友人であれば、その人に接近するし、反対に天敵であればすぐさま避けるであろう。時実（1976）の分類に従うならば、「判別性」の機能と言える。Gregory（1970）は「インテリジェント・アイ」と呼んでいる。

「このように遠距離物体からの信号によって事前に情報を与えることのできる感覚一特に眼一なくして、…(中略)…大脳は発達し得なかったことは確かです。…(中略)…空間において物体を認知し位置を知るには知的作用が必要です。…(中略)…そして現在なお私たちは視覚的諸概念によってその思考を支配されています」(Gregory, 1970, p. 12)。

確かに視覚的な概念は思考のプロセスにその「分身」を見て取れる。たとえば「見通し」(insight) という言葉はもともとは高台からふもとを眺めて、目的地までの道筋を発見した、というような意味であろう。それから転じて、ひらめきまたは直観 (insight) によって問題の解決策が得られたという意味になったことは容易に想像できる。「明晰」や「自明」、「解明」なども関係類語であろう。「明暗」に関係した言葉が多いようだ。

一方近感覚によってもたらされる情報に対しては、まず行動（反射行動）が生じ、それが「何か」を知るのはその後であることが多い。例。尖っているものに触れたり、腐ったものを口にした時など。「もし触覚

によって、害敵であることが判明したとしても、もはや対策をたてるには手おくれだ」(Gregory, 1970)。

c. 近感覚は進化の過程でより早く発達した感覚で、特に判別機能を持たない感覚は原始感覚とも言われる (Gregory, 1970)。一方遠感覚は高等感覚と呼ばれることがある。それはそれらの感覚を支配する大脳中枢の部位によっても理解できる。原始感覚の中枢は大脳の内部に、高等感覚の中枢は大脳の表面にある。一般に大脳は内部から表面へと進化してきたとされるから、そのことは明らかである (時実、1976)。

視覚はその中で最後に備わった感覚で、人間で最も良く発達している。人間の場合、外界から入力される全情報の約 85% は視覚情報である。人間が「視覚的動物」と言われる所以である。

太古の昔、動物は近感覚だけを装備し、ヒゲまたは繊毛などを通して、それらが届くまたはごく近くの範囲内の情報だけを頼りに生き延びていたに違いない。だから少しの環境の変化にも適応できずに多くの種が容易に滅んだに違いない。遠感覚を装備した高等動物は、前もって危険(環境の変化)を知ることができるから、生き延びる確率は高まったであろう。

d. 近感覚は生命の維持との結びつきが強く、一方遠感覚では弱い。たとえ視覚が障害を受けても、それ自体が原因で死につながることはない。一方近感覚の場合は深刻である。口にした物が変な味がしたとしても、それが分からなければ生命を失いかねない。

e. 近感覚の場合は、快—不快の感情との結びつきが強い。チクリと刺すような物体は、ある特殊な趣味を持つ人々は除き、多くの人にとって不快な刺激であろう。一方遠感覚の場合は結びつきが弱い。したがって、今見ている風景が優れたまたは快適な風景なのかどうかは人によって異なるし、あるいは同じ人でも評価が一定しないことが予想される。

表 1 ささまざまな場面における快適性（三星、2002）

1. 柔らかな布団にもぐり込んだ時（触覚）	.382
2. 木の香りにつつまれた森の中を歩いている時（嗅覚）	.205
3. 運動した後ジュースなどを飲んだ時（味覚）	.173
4. 冬の寒い日に暖房のきいた家（または部屋に）入った時 （温度感覚＝触覚）	.082
5. 野原の一本道を歩いている時（視覚）	.064
6. 静かな夜、遠くから鐘の音が聞こえた時（聴覚）	.05
7. 便秘の後、通じがあった時（体内感覚）	.045

表 1 は五感が関係するさまざまな場面の、どの場面で最も快適性を感じるかを調査した三星（2002）の結果である。（ ）の中は主に関係していると思われる感覚である。いずれの場面でも、関与しているのは単独の感覚だけというわけではないが、場面を変えた別な調査でもほぼ似たような結果であった。全体としては 5.（聴覚）と 6.（視覚）の順位が逆になっており、「視覚的快適性」は体内感覚を除き、最低であった。

1.2 判別性感覚・非判別性感覚、高等感覚・原始感覚

遠感覚・近感覚と似た感覚の分類法に判別性感覚・非判別性感覚および高等感覚・原始感覚がある。判別性感覚は外界における事物の識別や形の弁別などを行う感覚で、視覚や聴覚、皮膚感覚の一部が入る。一般に高等感覚と呼ばれる。一方非判別性感覚はそうした判別性を持たない感覚で、温度感覚、圧覚が入る。一般に原始感覚と呼ばれる。

時実（1976）によると、大脳は神経線維の統合のされ方で、3つの系（中枢）に分けられる。1つは新皮質系（neocortical system）、もう1つは古皮質系（archicortical system）と旧皮質系（paleocortical system）（これらを合わせて大脳辺縁系 limbic system と呼ぶ）、そして脳幹系（brain stem system）である。

これら3つの統合系（中枢）に送り込まれる情報は以下のとおりである（p. 4）。

a. 新皮質系…外部環境の変化に関する情報（視覚、聴覚、皮膚感覚や味覚のうち判別性の性質を持った触覚や甘さや塩からさの感覚）

b. 古皮質系と旧皮質系（大脳辺縁系）…視床下部にある受容器で受けとめられる内部環境の変化の情報、嗅覚、原始的な性質の強い皮膚感覚（温度感覚と圧感覚）、味覚（苦さと酸っぱさ）

c. 脳幹系…視床下部以外の体内の受容器で受けとめられる内部環境の変化の情報、痛み、平衡感覚、筋肉の張力の感覚

このように同じ触覚情報といっても、支配する大脳中枢から見ると3段階あり、判別性の性質をもった触覚は新皮質で、温度感覚などは大脳辺縁系で、また生命維持に深く関わる痛み（痛覚）は脳幹部が支配している。

味覚情報もまた支配される中枢が1つではない。しかし甘さや塩からさの感覚が判別性であり、一方苦さや酸っぱさが原始感覚に入る理由はよく分らない。一般に「変な味」（腐った味）は苦い味や酸っぱい味が多く、それだけ生命維持との関わりが深いためであろうか。このように支配的な大脳中枢が遠感覚と近感覚とで二分されていない点は本論文の展開にとって水をさす要素となりかねないが、しかし結論に変わりはない。

1.3 共感覚的比喩

われわれはしばしば「柔らかい色」や「甘い声」など、元来異なった感覚モダリティの形容語をつけて用いることがある。これを共感覚的比喩という。遠感覚と近感覚に関連して、面白い法則性が知られている。上の例のように、より低次の感覚モダリティ（近感覚）の形容語をより

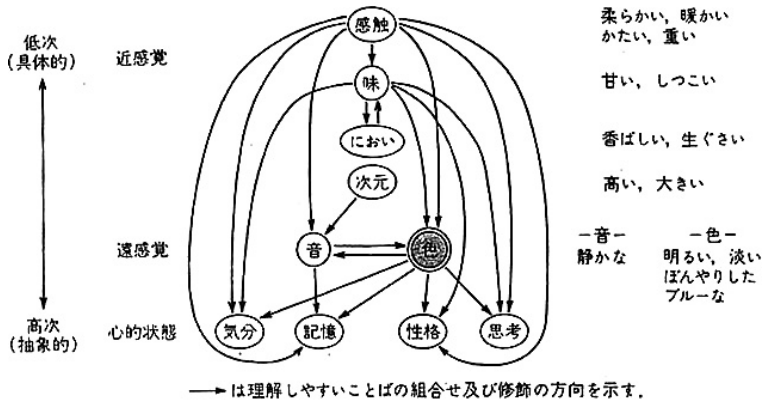


図1 共感覚的比喩 (楠見、1990)

高次の感覚モダリティ（遠感覚）に、さらにより高次の心的状態（気分、記憶、思考、性格など）の修飾につけることはできるが、その逆はほとんど見られないというものである（楠見、1990）。図1にその規定の関係を示す（楠見、1990）。

本書で述べる、視覚的欲求と触覚的欲求とどのようにかわるのか、必ずしも明らかではないが、いずれにしても近感覚の根源性という点では同じである。

2. 触覚的欲求と視覚的欲求

2.1 触覚的な評価語

眼はもともと皮膚であり、その一部が感光性を備えることによって眼となったとされる（Coren ら、1979）。「なめるように視る」や「なぞるように視る」などといった表現はその名残を窺わせる。そういう点では視覚に先行して触覚があったという事実は触覚の根源性を示唆する。



図2 神奈川新聞（2005年4月28日）

上に触れたように、絵画や風景を含めた視覚的イメージを評価する際に用いられる言葉に、視覚本来の評価語が意外に少ないことに驚かされる。図2は読売新聞からの記事である。「寒々しい光景」という表現の中で、「寒々しい」に代わる視覚的な修飾語は見当たらない。

さらに最近の読売新聞社主催ラ・トゥール（ジョルジュ・ド・ラ・トゥール）展（2005年3月8日～5月29日、東京・国立西洋美術館）の紹介文から言葉を拾ってみよう（三星、2006）。

■『聖ヨセフの夢』「静寂のうちに、神秘の気配が漂いだす」、「つつまじやかな部屋」、「飾らぬ簡潔なタッチ」（3月7日夕）

■『書物のあるマグダラのマリア』「美しい容姿」、「漆黒の闇」、「力強く語りかける絵」（3月9日夕）

■『ダイヤのエースを持ついかさま師』「ぎろりと白目をむく」、「鋭利な視線」、「場を凍り付かせる」、「かすかな光」、「闇に揺らめく」、「生き生きと描き出している」（3月10日夕）

■『荒野の洗礼者聖ヨハネ』「荒野の」、「薄明のうちに浮かび上がる」、「柔らかな光が包み込む」、「現代人の心を揺り動かす力」(3月11日夕)

この中で視覚本来の評価語は「美しい」、「漆黒の」、「薄明のうちに」くらいである。「力強く」、「揺らめく」、「生き生きと」、「浮かび上がる」、「揺り動かす」、「ぎろりと」は本来運動感覚の評価語であり、また「鋭利な」、「場を凍り付かせる」、「荒野の」、「柔らかな光」は触覚的な評価語である。「かすかに」はどの感覚に起源があるのか不明である。もしかしたら匂いかも知れない。

触覚などの視覚以外に起源があると思われる言葉はその他にもかなりある。たとえば、「暖かい」(「寒い」)、「鋭い」(「鈍い」)、「躍動的」(「動きのない」)、「荒々しい」(「おとなしい」)、「ゴツゴツした」(「なめらかな」)、「硬い」(「柔かい」)、「バランスのとれた」(「アンバランスな」)、「やさしい」(「厳しい」)などである。

言葉がないということはそうした意識がないことを意味する。したがって評価する言葉が少ないことは評価する意識が低いか、または難しいかのどちらかであろう。やはり視覚的なイメージを評価するのは難しいのである。

触覚などの視覚以外の感覚から「借りてきた」表現が多いことは、本来なら触覚的欲求に関する評価語を、〈必要に迫られて〉〈派生的に〉転用されるようになったことを思わせる。

2.2 触覚的欲求と視覚的欲求

触覚の根源性を考える時、心理学者 Harlow (1958) の行った「代理母親実験」と呼ばれる実験を思い出さずにはいられない (図3)。その研究の目的は、子供が母親を慕う感情(愛着と呼ばれる)は、母親が子



Harlow, 1959 より

図3 代理母親実験（塚本、2003）

供の空腹を満たしてやったり、不快感（濡れたおしめ）を取り除いてやったりしてやるためなのか、それとも母親との身体的接触（スキンシップ）を通して形成されるのかを確かめることであった。

結果は、針金製の代理母親からミルクをもらおうが、布製の代理母親からミルクをもらおうが、いずれの場合でも布製の代理母親のそばにいる（接触している）時間が圧倒的に多かった（最高 18 時間／日）。そこから Harlow（1958）は、動物には布のような柔らかい物に全身的に接触したいという接触欲求があり、それを満足させることで安心感あるいは安全感が生まれ、それが相手に対する愛着の根源になっていると結論づけた。

このように柔らかい物に触れたいという接触欲求あるいは触覚的欲求の満足が愛着の感情を生むのである。

ところでこの「愛着」は「アメニティ」または「快適性」につながるものではないかと著者は考えるのである。Amenity は pleasantness

表2 感覚の共様性 (大山、1962、この表は三星、2006 から引用)

尺 度	相関係数
熱 い — 冷たい	—
近 い — 遠 い	0.86
まるい — 角ばった	0.81
危 い — 安全な	0.79
さわがしい — 静かな	0.79
はでな — 地味な	0.71
嬉しい — 悲しい	0.70
女らしい — 男らしい	0.66
不安定な — 安定した	0.61

(快適さ、喜ばしさ) または語源的にはラテン語の *amoenitas* に由来し、総じて *amare* (愛、愛着) と関係しているという (酒井、1989)。快適な風景あるいは風景の美もまた、風景への愛着あるいはアメニティと関係しているのではないか、少なくともその一部を構成しているのではないかと思うのである。とすると、こうしたスキンシップを通した快に、風景評価における触覚の根源性の根拠があるとするのは無理があるだろうか。

大山 (1962) によると、「暖かい」イメージは「柔らかい」イメージや「丸い」イメージ、「女性的な」イメージにつながる (表2)。そこから直ちに「柔らかい」イメージが「丸い」イメージにつながるとは厳密には言えないが、高い相関は予想できる。とすると「丸い」イメージは、間接的にせよ、触覚的な快をもたらすイメージと言えるかも知れない。

図4と5は日本庭園である。Benoist-Mechin (1975) によると、日本の庭園は、中国の基本原則を受け入れ、シンメトリーを斥ける、庭を一望のもとに見渡す視点を避け、思いもかけぬ景色が次々と現れるようにすること、…、館の南面には木立に囲まれた空地があり、その中央に不整形の池がある。池の中央には小さな島があり、反り橋で岸と結ばれ



図4 識名園（那覇、著者撮影）



図5 明月院（鎌倉、著者撮影）

ていた。…(p. 54)」。文字通り、曲線の世界である。図4は那覇の識名園である。中央の建物に中国の様式が見られるが、上の日本庭園の特徴を良く示している。左端に反り橋があるのだが、それを「一望のもとに見られない」のはまさに設計思想通りと言えようか。図5は鎌倉の明月院である。識名園に比べはるかに「丸み」を帯びている。

一方視覚的な欲求についてはどうか。触覚的な欲求が満たされた時、(触覚的な)快が生ずるとするなら、視覚的な欲求が(もしあるとすれば)満たされた時、視覚的な快、すなわち快適な風景または風景の美がもたらされると考えるのは自然である。

それでは視覚的な欲求とは何か。欲求は目的(または誘因 incentive)を志向する。では視覚の目的とは何か。何のために視覚は備わっているのか。1つは遠感覚たる所以の、遠方の状態が認知できることおよびそこまでの距離情報が得られること。これは奥行感覚としての機能である。2つ目は明瞭な時空間の弁別である。ここでは時間的な要因はさておくこととして、高い空間的な分解能は、視力に代表される、空間を細かいところまで識別する機能である。したがってこれらの2つの目的が満たされる視野は快適な風景となる。

図6はLondon近郊のWorking市の街並みである。西欧の街はこの



図6 Working市（ロンドン近郊）の街並み（著者撮影）



図7 Kensington 庭園（著者撮影）



図8 Kensington 庭園（著者撮影）

ような直線的で、見通し（遠近感）の効いた構図になっていることが多い。また英国庭園はしばしば、「庭を芸術作品の域へと引き上げるいっさいの様式を拒絶して、「風景の中に溶け込まん」とする断固たる欲求……、その住まいの周囲に再現しようとするのは、いわゆる「自然の書割」であり……」（Benoist-Mechin, 1975）と言われるが、それでも西洋の他の国の庭園と共通しているものが多い。遠近感を効かせた、直線的かつシンメトリカルな構図を持っているものも多い（図7、8）。

中村（1975）は「図と地の分化」という観点から風景を論じる。「図と地の分化」とはゲシュタルト心理学が考える「形の成立」上の条件である（Metzger, 1930）。視覚的に一様な視野では、物の形および遠近感などは分ならず、まず視野が「図」（パターンとなる領域）と「地」（そ

れ以外の領域)に分かれる必要があるとする。

中村(1975)は実際の風景における図と地の特徴について分析を行った後、実際の風景では、地は地模様になっていること(のっぺりな空間はないこと)、図と地の関係が階層構造をなしていて、観察者との距離によって相互浸潤が起こること、そうした相互浸潤を生じさせないような図の存在を含む風景は観察者の目が受け入れないことを指摘している。そうした目が拒絶する図の候補として、金属製のガードレール、コンクリート製の電柱、海岸のやはりコンクリートの護岸などを挙げている。そうした図以外にはなりえない物を含む風景は不快な風景である。

一方芦原(1979)は地中海地方の街並みを見た経験から、西欧の街では、道路と建築の外壁(ファサード)が図と地の関係作り上げているのに対し、わが国の街ではそうした図―地関係が弱い点を指摘した。その原因として、わが国の街では、道路と建築の外壁の境界が、建築本来の外壁(彼は「第一次輪郭線」と呼ぶ)ではなく、「ひらひらするもの」、「突出するもの(看板)」などの第二次輪郭線によって占められており、図―地関係が形成されにくいとしている。

両者の論点には自然景観(中村、1982)と都市景観(芦原、1979)など、微妙な違いがあるが、いずれにしても風景の美には、視野が「明瞭に」図と地に分かれていることが必要だ。これは視覚的欲求を満たす条件である。さらに「ひらひらするもの」、「突出するもの(看板)」などの第二次輪郭線は、明らかに見通し(奥行感)を阻害する。その点ではわが国の街の景観は二重に劣悪であると言える。



図9 オモチャのような街 (Buenos-Aires, Boca 地区 著者撮影)

3. 明るさ（明度）の役割

3.1 リープマン効果

「図と地の分化」において、図と地を分ける境界線の明瞭さは図と地の明度に依存することが知られている。もし図と地の明度が等しい時には、たとえば色がどれほど異なっていたとしても、その境界線の知覚は弱まる。場合によっては（色の組み合わせによっては）境界線が消失してしまうことがある。これをリープマン効果（Liebmann effect）と言う。

そうした状態にある視野は全体としてはぼんやりとした印象となろう。したがって快適な風景とは言えないであろう。このように視野に適度に明るさ（明度）の差があることは、視覚的な欲求の満足につながる。おそらく明るさの差だけではなく、適度な色の差も視野を明瞭に見せる要素となろう。欧米でしばしば見られるオモチャのような街が、どうしても気になる（頭から否定できない）のは、こうした理由からである（図9）。

3.2 色彩調和論

色彩調和論はこれまで無数に提案されているが、その多くが同一（または類似）の調和と対比の調和を仮定している。同一（類似）の調和に関しては本論文で仮定している視覚的欲求の仮説と矛盾するようにも思われるが、しかしそれはもう一つの触覚的欲求を満たす構図と言えるのである。触覚的な言葉で表現するなら、（色および明るさにおける）視野の同一（類似）性は「つるつるとした面」に近いものである。少なくとも「ごつごつした面」ではない。ただしこの点についてはここではこれ以上触れない。

色彩調和論の中で、もっとも包括的で、わが国でもっとも良く知られているのは Moon & Spencer (1944a; b; c) の色彩調和論である。彼らは、調和の程度（美度）を

$$M=O/C$$

（ここで、M は美（度）、O は秩序または統一、C は複雑性または変化）というアメリカの哲学者 Birkhoff G. D. (1933) の定義を採用している。この式では秩序によって示される分子の値が大きいほど美度が高いことになる。その分子の値を求めるための表では、もっとも大きな得点は明度における対比の調和から得られるとしている（+3.7点）。視野の中の適度な明るさの差は全体として調和を導くとしているのである。

一方明度における同等の調和（結果的にこれを本当に調和と言えるかどうか疑問であるが）は、眩輝（グレア）を除けば最大のマイナス要因である。すなわち等明度の視野は調和をもたらないどころか、調和を乱す要因としている。

こうした仮定は、リープマン効果を生じさせないような視野、図と地がはっきりと分かれているような視野さらには形が明瞭に知覚される視野が快適な風景の要素であることを示唆している。

4. 風景知覚における知識

4.1 風景の見方

上に述べたように、遠感覚としての視覚は快—不快との結びつきが弱い。したがってその評価は人によって異なるし、また同じ人でも場合によって変化する。それだけ評価の自由度が高いと言える。換言すればその「見方」によって大きく左右されることになる。「見方」はスキーマ、フレーム、図式、知識、枠組み、あるいはフィルタリングなどと呼ばれることがある。

関東平野で「屋敷森」を見ると、そこに家があることが分かる。しかし物理的には木立しか見えていない。つまり「見えないもの」を「見る」のである。またノルマンディー地方の「ボカージュ（境界林に囲まれた畑地・牧草地）」で頂部を剪定された柳の木を見ると、そこに「沼」があることが分かる（ベルク、1990、p. 44）。ベルク（1990）はこの知覚の補完作用を「図式化」と呼び、風景の知覚に本質的な意味を持つとする。もしこれがなければ世界は単なるカオスであり、理解することができない（同、p. 45）。

また琵琶湖や江戸前の海のことを指す近江八景あるいは金沢八景（横浜）がそうした名前の下に「鑑賞」されるようになったのは、もともと中国中西部の風景とともに「瀟々八景」という美的図式が過去の文人たちによって中国からもたらされたからである。それ以前の日本人は琵琶湖あるいは江戸湾の単なる湖面あるいは海面を見ていたに過ぎない（ベルク、1990、p. 48）。

同様に白樺林や武蔵野の雑木林が鑑賞されるようになったのは、明治に欧米の思想が輸入されて以降のことである。日本人はそれまでそうい

うものを見ていなかった。それに必要な美的図式を持ち合わせていなかったからである。武蔵野の農民にとっては何世紀にも前から雑木林は日常的な現実であったが、それが「風景」となったのは国木田独歩の小説『武蔵野』が成功し、教養ある層の人々が適切な図式を社会に定着させたからである（ベルク、1990、p. 48）。今でも地方の多くの人々にとって雑木林はどこまでも（役に立たない）「雑木の林」であり、それ以上の意味はない。

絵はがきや観光ガイドの写真も基本的に同じ知識の効果を持っている。それらを見ていなければ（個人的には）何ともない景色が、見た後では「風光明媚な」風景に変わるのは不思議である。さらには絵はがきすらもいらないかも知れない。「美しい場所」だと誰かに聞いていれば、やはり見方が変わるであろう。そうした見方が介在しなければ、単なる環境であり、風景ではないのである。

4.2 絵画と文字情報または「絵画の読み方」

これは風景そのものではないが、ここ数年の間にゴヤやゴッホの絵がのみの市などから見つかり、20万円程度の値段が数億円に跳ね上がったという事件があった。

ゴヤの絵はある民家の壁にかかっていたものだが、署名がなかった。したがってゴヤの絵かどうか分からなかったし、同時にその（絵としての）価値が分からなかった（読売新聞 2003 年 5 月 10 日）。

一方のみの市から見つかったゴッホの絵は、その署名によってかろうじてゴッホの絵と分かった（読売新聞 2003 年 11 月 28 日）。つまりゴッホやゴヤの絵の価値を絵そのものから評価できなかった。それが署名などの副次的な情報によって気づかれ、それによって初めて作品の評価ができたと言えなくもない。

このような言い方は、美術評論家の方々には大変失礼なことである。しかし著者がこれまでTVや新聞で見たり、聞いたりした評論家の評論、および美術集やカタログでは、まず作者の紹介から始まることが多い。作者の生存期間や誕生地、その絵が描かれた時の境遇や時代的・社会的背景などである。また実際に美術館などでは、絵画や彫刻を鑑賞する前に、その説明文を読む人が多く見られる。

こうしたことはまさに上に述べた、絵画（視覚的イメージ）をそれ自体として評価することが難しいことを示すものではないだろうか。著者の美術における才能の欠如にもよるが、恥ずかしいことに、事前にそのタイトルを読むことなしに、抽象絵画を理解した経験はあまりない。宗教の知識なしに宗教絵画が理解できるだろうか。遠感覚としての音楽にも似たような面がある。

しかし著者は何もそれを悲観的に言っているわけではない。それどころか、絵画（視覚的イメージ）と文字情報とは不可分なのではないかと思うのである。それがまさに視覚と思考との接点ではないかと思うのである。絵画には、したがって風景にも、そうした思考的なまたは知的な記号が埋め込まれているのではないか。したがってその記号が読めないと絵画または風景は理解できないのではないかと思うのである。しばしば「絵画の読み方」と言われるのはそのためではないか。絵画、および風景も、そうした知識によって、それが「意味する」ような方向に変化して「見え方」が変化し、スキーマまたはフレームに合致していくのであろう。

5. 快適な風景

5.1 動物行動学的アプローチ

ここで色彩を除いた、視覚システムの特徴という観点からあらためて快適な風景について考えてみよう。英国の地理学者 J. Appleton (1975) は、古代人にとって動物あるいは他の部族との戦闘において、戦略的に価値の高い風景が現代における美的な風景になったとしている。つまり人間を含めた動物にとっての棲息地としての条件を備えた場所であるとする。それは敵から見られない場所（隠れ家）と敵が見える場所（眺望）のある風景である。多くの庭園あるいは公園には四阿（あずまや）があるし、展望空間（台）が備えられているのはその名残である。

Appleton のこの考えはローレンツからヒントを得たと言われている。下にローレンツ (1987) の言葉を紹介しよう（この部分の抽出は樋口、1993 から引用、p. 113-114）。

「私たちは高くそびえたブナの森にでかけた。（中略）やがて私たちは森の中の開けた草地に近づいた。ブナの高いツルツルした幹は、森をふちどるこんもりしたヒースの藪にかわる。私たちは足どりをゆるめ、これまで以上にあたりに気をくばりだした。いよいよ最後の藪をくぐりぬければ、平らな草地へでる。そこまできて私たちは、あらゆる野性の動物が、そして動物通やイノシシやヒョウや狩人や動物学者たちが、そうしたときにきっとするように振舞った一つまり、いきなり草地へとびださずに、注意深く藪の中からむこうをうかがったのである。こうすれば、自分の姿をかくしたまま相手の姿をみることができる。それは狩るものにとっても、狩られるものにとっても有利なことなのだ (p. 213)。」

また品田穰 (1985) も、外敵に襲われた時、植栽の陰など、身を隠す

のに適していると感じられる風景が現代の快適な風景につながっているとしている。

ところでベルク（1990）によると、眺望点から見渡すという行為は「視線による支配」を意味すると言う。例えば、国見という地名は全国にあるが、もともと天皇がその地点で周囲を見回し、領地に対する自分の主権を天下に知らせた名残だという。

また庭園の本来の機能は、自国の辺境の風景を王宮の周囲に再現し、自分の視線の届く範囲内に配置し、そこを象徴的に支配することにあると言う（同書）。

この「敵が見える場所（眺望）」とは「見通しのきく風景」であり、それは本書で主張する視覚的欲求の満足に他ならない。一方「敵から見られない場所（隠れ家）」については、奥行き感覚を助長するための重なりの手がかりと考えることもできるし、また外敵にとっては見通しをさえぎる風景（不快的な風景）になっているとも考えられる。

5.2 視覚（遠感覚）の特性からのアプローチ

視覚の特性は基本的に問題解決であった。したがって何らかの意味で問題解決あるいは知的解決に結びつく風景は視覚的欲求を満足させると考えられる。

a. 図と地が明瞭に分化した風景

視覚の目的は外界の明瞭な認知であると考ええると、視野の基本的な構造が図と地に明瞭に分化している風景は視覚的欲求を満たすと考えられる。図と地の分化は主に明度の違いによってもたらされるから、視野内に明らかな明度の違いがあることが重要である。逆に明らかな明度の違いがないと、視野は全体としてぼやけ（リープマン効果）、視覚的欲求を満たさない。

b. 見通しのきいた風景

遠近感という視覚の重要な機能を満たす風景である。視覚的に問題が解決された（見通しが立った）風景と言える。上の Appleton (1975) の動物行動学的なアプローチも部分的にはこの要因で説明される。

c. 明るい風景

暗い状態から、十分な光によって「明るく」なることは、外界の状態を「明らかに」する（解決する）ことに結びつく。隠れていたものが「露わになる」というのは解決以外の何ものでもない。

d. 直線的な風景

これはbの見通しのきいた風景と重なる。光という直進性を持った刺激によってもたらされる視覚にとって、直線的なものはその欲求を満たす。直線的なパースペクティブは普遍的な美的モチーフである（長安、京都、ベルサイユなど）。ベルク（1990）によると、元来「直線」という言葉は王（＝聖職者）から来ており、王は都市の敷地の線を引く権限を持つ者であった。想像力を働かせるなら、直線によって区画された自分の敷地に対しては、強い「愛着」が生じるということであろうか。

e. 「見方」の学習

視覚には知的な過程が関わっているため、その善し悪しの判断には知的な作業が必要となる（「風景如画」）。したがってそのための教育が大きな手助けとなろう。風景には「見方」または「読み方」というものがあり、それを学習することによって自分の中にいい風景の原型（「原風景」と言うことができるだろうか）を築くことができる。

5.3 触覚（近感覚）特性からのアプローチ

上で述べたように、Harlow (1958) は柔らかいものに全身的に触れることによって、その対象に愛着が生じると考えた。一方風景あるいは

景観におけるアメニティにも風景（景観）に対する愛着の思想がある。これらの愛着が同類のものであるとすれば、アメニティをもたらす風景（景観）はどこかで触覚的な愛着とつながっていると考えられる。

a. 明るい風景

まず文字通り「柔らかな風景」が候補にあげられる。「柔らかな風景」はあまりにも比喩的な表現で、これ自体ではイメージすることがむずかしい。

ところで、色の心理的効果の「硬軟感」は色の明度と深い関係にある。したがって「柔らかな風景」は「明るい風景」ということになる。しかしあまりにも明るい色（明度9以上）は返って硬い感じが強まる。明るければいいというものではないようだ。彩度に関しては、高彩度・低彩度の色は硬い感じになるので、あまりにもガラガラした風景は良くない。

b. 丸みをおびた風景

「柔らかな」は「とげとげしくない」あるいは「角がない」という意味で「丸い」あるいは「丸みをおびた」につながる。庭園などに見られる植栽の丸い形状や最近の歩道橋の丸い形状は見る人の感情を和ませる。また古来女性の裸体が多く、画家のモチーフになってきたのもうなずける。

c. 子どもの共感覚

成熟した大人は感覚が分化し、共感覚の能力が低下していると言われる。とすればまだ感覚（特に視覚と触覚）が未分化な子どもの共感覚能力を利用するのも一計である（三星、1993）。子どもは視覚的なイメージ（風景）を触覚的に評価するのが案外容易かもしれない。

最後に

本文にも書いたが、著者は今でも絵画が良く分からない。いいと思う作品はもちろんあるし、好きな作家もいる。しかし、感激するような作品の思い出はあまりない。著者の才能のなさと言ってしまうがそれまでだが、絵画の鑑賞というのは難しいのではないかという思いが募っていた（自分の才能のなさを弁護するためもあるかも知れない）。風景も然りであり、いい風景はあるが、周辺の街並みの風景を評価せよ、と言われると途端に窮してしまう。音楽はそれに対して、少し感激の度合いが高い。

文学作品などではかなり感動することがある。とすると人間は、感動、さらには一般に感情、というものは、言葉を介した論理的な思考あるいは知識と結びついているようにも考えられる。我々は言葉という論理的な記号によって感情を刺激されるのかも知れない。大脳において、その処理に共通の回路が使われているのかも知れない。

と言え、風景そのもののの中にその回路を使うための手がかりがあるものと思われる。本論文においては、遠感覚と近感覚という二分法を用いて分析を試みた。風景の知覚は単純なものではなく、近感覚の機能によるもの、遠感覚の機能によるもの、さらには知識などの思考回路によるものなど多重階層構造になっているのでないだろうか。

引用文献

Appleton J. (1975) The Experience of Landscape, John Willy & Sons, London (菅野弘久

訳『風景の経験—風景の美について—』、2005、法政大学出版会)。

芦原義信 (1979) 『街並みの美学』、岩波書店。

- Benoist-Mechin J. (1975) *L'Homme et ses Jardins ou Les Metamor-phoses du Paradis terrestre*, Paris (河野鶴代・横山正訳『庭園の世界史』、1998、講談社)。
- ベルク A. (1990) (篠田勝英訳『日本の風景・西欧の風景—そして造園の時代—』、講談社文庫)。
- Birkhoff G. D. (1933) *Aesthetic Measure*. Cambridge, Mass: Harvard Univ. Press.
- Coren S., Porac C. & Ward L. M. (1979) *Sensation and Perception*. New York: Academic Press.
- Gregory R. L. (1970) “The Intelligent Eye” (グレゴリー R. L. 著 金子隆芳訳、『インテリジェント・アイ 見ることの科学』、1972、みすず書房)。
- Harlow H. F. (1958) The nature of Love. *American Psychologist* 13, 637-685.
- 樋口忠彦 (1993) 『日本の景観—ふるさとの原型—』、ちくま学芸文庫。
- イーラー・トウアン (小野有五・阿部一訳『トポフィリアー人間と環境』、1999 年)、せりか書房。
- 勝原文夫 (1999) 『環境の美学—ムラの風景とアメニティ—』、論創社。
- 楠見孝 (1990) 比喩理解の構造、芳賀純・子安増生編『メタファーの心理学』、第 3 章、誠信書房。
- ローレンツ K. (1987) 日高敏隆訳『ソロモンの指環—動物行動学入門—』、第 12 章、モラルと武器、p. 213-234、早川書房。
- Metzger M. (1930) *Optische Untersuchungen in Ganzfeld II*. *Psychol. Forsch.*, 13, 6-29.
- 三星宗雄 (1993) アマゾンメーモ—色彩・環境・熱帯密林—、神奈川大学・人文研究—第 119 号、43~63。
- 三星宗雄 (2002) 視覚的欲求と視覚的快適性、神奈川大学心理・教育研究論集、第 21 号、95-99。
- 三星宗雄 (2006) 『環境色彩学の基礎』、マックローリン出版。
- Moon P. & Spencer D. E. (1944a) Geometric formulation of classical color harmony, *J. Opt. Soc. Am.* 34, 46-59.
- Moon P. & Spencer D. E. (1944b) Area in color harmony, *J. Opt. Soc. Am.* 34, 93-103.
- Moon P. & Spencer D. E. (1944c) Aesthetic measure applied to color harmony, *J. Opt. Soc. Am.* 34, 234-242.
- 中村良夫 (1975) 『風景学入門』、中公新書。
- 大山正 (1962) 色彩の心理効果、照明学会誌 46, 452-458。
- 酒井憲一 (1989) 都市時代の闘うアメニティ、AMR (アメニティ・ミーティテング・ルーム) 編『アメニティを考える』、p. 145-156、未来社。

品田穰（1985）『都市の自然史—人間と自然のかかわり合い—』、中公新書。

塚本伸一（2003）角山剛・小西啓史・三星宗雄・渡辺浪二編『基礎から学ぶ心理学』、第7章、
発達、Pp. 169-190、ブレン出版。

時夷利彦（1976）『脳と神経系』、岩波書店。

鳥越鱒之（1999）『景観の創造—民俗学からのアプローチ—』、昭和堂。